『忘れたの？』

言葉には力がある。

暖かな言葉が人を癒すように、辛辣な言葉が人を傷つけるように、言葉には自分自身を含む全ての《人》に影響を及ぼす力が確かにある。

暗く歪んだ言葉の力は滞り、魔物となり人々に害を加えるようになった。

人々は魔物を討つために、言葉を銃弾に込め、それを言弾と呼んだ。

武器を扱う正しい知識を得るために、研究し、学問を作り、学び舎を建てた。

そうして発展して来たこの大陸の首都ラングアゲ、その隣国に位置するニアラ。

自身の言葉―言霊に心を蝕まれた少年少女達の精神ケアを請け負う施設、タ―ム。

一方で、悪言の研究、討伐の援助、新しい《言葉》遣いの育成を行っている。

これは、言葉が力を持つ世界に生きる少年少女のお話。

＊＊＊

さあて、堅苦しいチュートリアルは斜め読みのマシンガン乱射で突破だぜ！？

総勢十数名の馬鹿共がお送りする、言葉遊び系ハイテンションガンアクション！

これが最後のアンコール！

言弾シリーズ　スピンオフ

信じろ！

走狗流歌

―――番組の後にプレゼントのお知らせ！最初のキーワードは――

И

ニアラ校外にどどんと居を構えるのは前述したタ―ム。四六時中馬鹿騒ぎしている落ち着きとは無縁な場所だが、今日は不気味なほどに静かである。

「……何か言いたいことがあるならはっきり言ったらどうだ、葬屋」

「……お前こそ、アイコンタクトだけじゃ伝わらねーんだよ、颯火」

ピロティーで静か（※当社比）に見詰め合う、というか、ガン飛ばし合ってるのは、今作主人公二人組。ブレザー姿の弔祇葬屋と、学ランルックな悼颯火である。

日常会話の八割が互いの罵倒というくだらない応酬で構成されている幼馴染の二人だが、今日は口を堅くつぐみ、目だけで会話しているようだ。パッと見キモイですね。

というのも、今日、タ―ム内には特別なルールがしかれていたのだ。

『いい？　今日一日、絶対悪口言っちゃ駄目だからね？』

今朝方、ゼペット（タ―ムを取り仕切る悪言研究者）が突然そう言ったのである。

「愚痴、悪口、陰口、罵倒、罵詈雑言。全部今日は禁止ね。僕はこれから爆くん達と出かけちゃうけど、絶対に言っちゃ駄目だよ。あ、もちろん筆談も不可ね」

「え、ど、どうしてなんですか…？」

反論受付ませんスマイルで語るゼペットに、恐る恐る尋ねたのは互井蒼慈（たがいそうじ）。兄の霊魂である霜一を負の言霊の力でこの世にとどめている《異魂遣い》の少年である。

「話せば長くなるんだけどね…、《かくかくしかじか》…、というわけなんだよ」

「は、はあ、そうなんですか…」

ナルホドナーそれならしかたないナー、と一同納得の表情。

「よし、じゃあ爆くん、麗斗くん、早速でかけようか」

「おう」「了解です」

それじゃあ、と、食堂を出て行くゼペット一行。穏やかに見送るお留守番一同。
バタン、
「……って、説明になってねええええッ！」
ドアの閉まる音で我に返った颯火の叫び声が、虚しく食堂に響いた。遅いです。
ゼペットさんのチート言霊コレクション、《内容省略（かくかくしかじか）》。派生系は《閑話休題（それはともかく）》。
「チキショウ、せめてまともな説明していきやがれこの―――」
「黙れ、」
ひやり、と銀の刃がのど元を掠め、颯火の言葉が遮られた。その背後には澄田鶯。相手の言霊を打ち消す《黙秘剣》の遣い手である。颯火から乾いた笑いが漏れる。
「……、」
無言かつ無表情なままの鶯は刀を鞘にしまい、何か言いたげな視線を、不機嫌そうに眉をひそめて肘を突いている少年・頼野琴樹に向けた。琴樹はため息を一つついて、
「あのゼペットが言うことだから、きっと何かあるに違いない、従っておいた方が身のためだ…、って言いたいんじゃないの？」
「何で分かるんだよお前ェエッ！？」
さらりと代弁。ナチュナルに読心術発揮するの止めてください琴樹さん。
「ふふん、僕ら最近仲がいいからね。僕くらい気が利く人間なら友人の言いたいことくらい分かるよ。鈍感でギリカン（ズバッ／ザシュッ）の無いお前らとは違うんだよって痛ァッ？！　何すんだよ鶯！　柄で殴るなよ！」
「……言論統制……、」
だから、嫌味もアウトだって言ってるじゃないか、とばかりに鶯は小さくため息。
「よし、鶯の意を汲んで、今日は正しい言葉遣いを心がけよう！　特に葬屋、颯火、琴樹、霜一、貴様等特に気をつけろ！　わかったな！」
パンパンと手を叩いて、ここぞとばかりに仕切り始めたのは記述師・柏皐月。
「なんで皐月が仕切るんだよ！」
「それは私がこの中で一番常識を兼ね備えた完璧な人間だからだ！」
無い胸を張って高らかに言う皐月。自分で完璧とか言ってるあたり、何かの欠落を感じさせますね、頭とか。問題児４人も全力で反論したいところだが、横で鶯が目を光らせているので黙らざるを得ない。
まあ、この罵詈雑言で構成される物語は思春期の青少年の言葉遣いによろしくない影響をあたえそうですし？　これ気に軌道修正してみるのもいいかもしれませんね！
……あ、うん、無理ですね！
「ははは！　俺達はノーチェックだぜ？！」「日ごろの行いがいいしな！」
「悪口なんていわないしね！」「罵倒なんて全然しないしね！」
「うわ！　俺達ってば超良い子！　ヤベェ！」「マジ優等生！　パネェ！」
「へへへ、俺達のことお手本にしてもいいよ！」「照れるね、風刃！」
罵倒という名のツッコミが無くなりボケ倒しのハイテン双子は音斬風刃と雷人。言いたい放題やりたい放題の野放し状態である。うざいです。
「は、はやくこいつらどうにか…しないと…っー…とりあえず頭ぶちぬいて……」
「落ち着け！　気をしっかり持て葬屋！　はい！　大きく深呼吸っ！」
『あ、ていうか、お前達の歌って歌詞が割りとエグいから、演奏はできないな』
「「メギャアアーーーーーーーーーーッ！？」」
反撃とばかりに放たれた霜一の言葉に、高周波の奇声を発する双子。
「歌が歌えないなんて死んじゃうよ雷人！」「生きろ風刃！　俺がいる！」
「雷人ぉおおお！！」「風刃ぁあああ！！」
『アハハハハｗｗｗｗマジぷぎゃーｗｗｗｗｗｗ』
うえーんと、抱きあって泣きじゃくる双子を全力で嘲笑う霜一。絵面が酷いです。
「なんだか大変なことになってきたねー」

「そうだね…」「(> <;;;)」

突然の言論統制に悶絶する馬鹿どもを、通常運行で問題なしな善良三人組、黄泉河(よみかわ)鋭利(えり)と憂戯由卯(うさぎゆう)、それから澄田水鳥(みどり)がぼんやり眺めていた。

そして、今に至る。

口喧嘩でしかコミュニケーションとれないこのどうしようもない幼馴染コンビは、仕方なくガンの飛ばし合いという殺伐としたアイコンタクトで罵倒の念を送っていたようですね。今日ばかりは仲良くしようぜ的歩み寄り精神はゼロである。

「俺は悲しいよ、颯火。俺達こんなにも平和な会話ができないなんてさ…」

「たしか、俺達天気の話をしてたはずだったのにな…」

社交辞令の会話すら口論に持ち込んじゃうのが我等が主人公です。

「よし、颯火、ここは平和的に行こう。お前だって顔突っつき合わせてのにらみ合いは不本意だろ？　会話が少なくて絵面がキモイし」

「本当、葬屋ポジが可愛い女の子だったら、立派なラブロマンスなのに…」

「は、はは、そうだな…」(うるせぇよ悪かったな！　元はといえばお前が以下略)

「葬屋、平和的に行くんじゃないの？」(ハァ？！　先に手前がふっかけて以下略)

(長時間お前を映すハメになった俺の眼球に謝れよ！)

(そっちこそ、手前を認識せざるを得ない俺の脳に謝れよ！)

(即刻失せろよ！)

(全力で消えろ！)

そして、また目だけで喧嘩を始める二人。だめだこりゃ。

というか、目だけで大体相手が何言いたいか分かるのって、琴樹と鶯と一緒でそれなりに仲よくなきゃ出来ない芸当だってことを二人は早く気付くべきですね。

そんな不穏な雰囲気のピロティーの隅では音斬兄弟がノートを広げて相談中。

「だ、だめだ、無理だよ雷人！」「大丈夫、風刃ならできるよ！　俺を信じて！」

「で、でも、今日のNGワードを使わない明るい歌詞なんて書けない！」「風刃！」

どうやら、いつもの詩を禁止されたので、新しい曲を作ろうという魂胆のようです。

「そもそも、こんな暗い曲調じゃ無理だよ！」「ああ、そっか！　ごめん！」

「いや、雷人は悪くないよ！　俺がいけな…」「ばかっ！　風刃！　自虐は駄目だろ！」

「雷人…、う、おれ、おれぇえ…！」「風刃、一緒にがんばろう！　きっと出来るよ！」

涙ながらに手を取り合う双子。今にもあの夕陽に向かってとか言い出しそうな、謎の青春オーラを纏っている。もう勝手にしてください。

一方その頃、蒼慈(霜一)、琴樹はというと。

口の悪さに定評のある琴樹と、罵りたい罵られたい霜一は、口を開けば鶯に怒られることは分かっていたので、自室にこもってやり過ごそうとしたのだが、ルームメイトである二人は見事鉢合わせしてしまったのだった。間が悪いですね。

琴樹は故郷の幼馴染で片思いの相手・凛に手紙を書いて霜一蒼慈の存在を忘れようとしているようですね。一方で、負の言霊の力が少なくげっそりした兄・霜一と、完全無視を決め込む琴樹にはさまれた蒼慈はおろおろするばかり。

「こ、琴樹さん…！　な、何を書いてらっしゃるんですか…？」

「……、」

無視。振り返りもしません。静寂に耐え切れず、蒼慈がちょっと泣きそうです。

『おい、有毒少年、お前いつもみたいにどっかいけよ！　苛めたくなるだろ！』

耐えかねて霜一が叫んだ。フォローしておくと、彼は今力不足なので誰かしら苛めて悲鳴だの罵倒だのしてもらわないと困る状態なのであって…、まあ変態ですが。

「僕だってそうしたいけどさ！　今、鶯のやつあのおかっぱと一緒なんだよ！　行きづらいじゃん！？　二人きりにしておきたいじゃん！？　応援してやりたいの！」

そう、鶯は相棒の皐月ちゃんに絶賛片思い中なのである。まあ、無表情の所為でま

るで気付いてもらえてないんですが。片思い仲間だから二人は仲が良いんですね。
「確かに、僕が行った方が会話は繋がるかもしれない。でも！　やっぱり二人っきりってすごく大きいと思う！　僕もリンと一緒がいいし！　リン可愛い！　好きだ！」
好きだ本当好きだとか枕をバフバフ叩きながら一人盛り上がる琴樹。激しくキモイ。
「だから、ここでお前と喧嘩にならないように黙ってたのに……、あ」
琴樹はハタと手を打って、咳払いを一つ。不機嫌そうに潜めていた眉を八の字に、ふてぶてしい顔を無邪気なそれに作り変えて、にっこり。
「ちょっと、不本意ですけど、霜一さん相手に猫かぶればいいんでした！」
「うぇ！？　こ、琴樹さん？！」『うわ、誰だよおまえッ』
「いやだなあ、そんなに褒めないでくださいよ。えへへ、照れちゃいます～」
『うぎゃあああああああッ！？』
寒気に身体を掻き毟る霜一。蒼慈も呆然。
久しぶりに発揮される琴樹の得意技・猫かぶり。これでふてぶてしい性格を隠し、真面目で無邪気ないい子を演じて、凛に嫌われないようにしていた時期もありました。
「だ、大丈夫ですか、霜一さん！　どこか悪いんですか？」
『やめっ、うっ、その、あ、しゃ、しゃべりかたっ、寒気がッ』
キラキラオーラの琴樹に、霜一は青い顔で縮こまる。説明しよう！　負の言霊の塊である霜一は無邪気で素直な言霊に当てられると拒否反応を起こしてしまうのである。
「あはは、霜一さん面白いですね！」
ハハハハ、と爽やかに笑う琴樹。すごく楽しんでます。歪んでますね。
「なんか凄いですね琴樹さん…！　あ、でも、その口調だと若干僕とかぶりま…」
「少し黙っていてもらえますか？」
「ひぃ！？」
中身は通常運行です。

場所は戻って主人公二人がいるピロティー。
二人は無言のまま、互いに銃を構えて臨戦状態にまで入っていました。
「二人ともさあ、そこまでするなら別行動すればいいんじゃないの～？」
ぼんやり見ていた鋭利が呆れ気味に言うが、二人は剣呑とした姿勢を崩さない。
「俺だってそれ提案したよ、一回！　そしたら颯火がさ！」
「仕方ないだろ！　俺、一人で居ると死んじゃうんだから！」
「うさぎかよ！　たまには別行動も新鮮だぜきっと！」
「手前な、俺達単体だとただの高校生って設定わすれてんなよ！」
アイデンティティの危機でした。
「でも、その気持ち分かるよ、颯火！」「俺達も離れたら死んじゃうもん！」
「いや…、俺のは多分お前らのソレとは大いに違うと思う…多分もっと軽い……」
「ハッ、わかったよ雷人！　この想いを詩にすればいいんだ！」「なるほど！」
「あの……仲がいいのはわかったから…黙っててくれないかな……」
疲れ気味にいう颯火に、次の瞬間、アイディアの神様が降臨した！
「アアアアッ！　わかった葬屋！　あれやろう、くさい言葉しりとり！」
くさい言葉しりとりとは、その名の通りくさい言葉のみでしりとりを行うというもので、葬屋と颯火の連携技によく用いられる言弾詠唱の一つでもあるのだ！　この時ばかりは台詞がくさい言葉しばりですから、罵倒なしで話ができるというわけです。
「なるほど…！　今初めて颯火頭いいとか思ったよ、俺…」
「あっはっは、だろー？　そうだろー？　もっと褒めていいよ、葬屋！」
「えっ？　えー……っと……、」
「本気で悩まないでよ俺ちょっと悲しくなる！」
そんなこんなで、くさい言葉しりとりで時間つぶし開始。
「あいしてる、たったこれだけ言うのが、こんなにも難しいなん《て》…」

「てめぇ、よくも、俺の大切な人を…ッ！　お前だけは絶対に許さな《い》！」
「いつまでも一緒だよ、例えこの身が朽ちようと、ずっ《と》」
「隣にいたいの、あなたの傍《に》…」
…これを野郎二人が面と向かって真顔でやってるとこを想像してください。
「憎い？　当たり前だろ。それだけ、君を愛してるってこと《さ》」
「できたあああ！」「お、おめでとおおお風刃ァ！」
おや、外野が騒がしくなってきましたね。
「寂しい…、なんていわないよ。君を哀しませたくないから《ね》」
「これなら歌っても怒られないぞ！」「すごいね風刃！　さすが！　かっこいい！」
「眠りから覚めたら、一番初めに貴方に会いたい《な》…」
「えへへへー！　照れるなあ！」「よし、早速演奏してみよう！」
音斬がギターをセットし始めましたが、しりとりに集中することで無視ります。
「何でも言ってくれ、お前のためなら、なんだってしてやる《よ》」
「♪　ドーは奴隷のドー」「レーは轢死のレー」
「……、夜は貴方のことを考えて眠るの、夢で会えるよ《う》……」
「♪　ミーはみーなごーろしー」「ファーはファファファファー」
「♪　ソーは削ぎ落としー」「ラーは落下死よ―」
「♪　シーは死にたがりー」「さあ、うーたーいーまーしょー」
そして、プチ、と何かが切れる音。

「うるせえよ手前ら黙れよミュートしろよそしていつもどおりだよ歌詞ッ！」
静かにしてろよ馬鹿この騒音双子こっちは真面目にしりとりしてんのにさ！」

あ、
「「あ」」
「あーあ」「やっちゃったー」
激しく突っ込みどころ満載の音斬に、ついに二人の我慢の限界が訪れ、いつもの調子で罵ってしまいましたね。ありゃあ、これは完全にアウトですねー。
「さ、さきにいったのはお前だから《な》…」
「なにいってんだよ、手前だ《ろ》」
「…ろくなことねー《な》」
「…なんでこうなるか《な》」
アハハハ、と乾いた笑みを浮かべ、沈黙する二人。そして、地味に続くしりとり。
……あれ、なにも起こりませんね？
画面の端に（この騒音の中）熟睡中の鋭利が映るだけで、なんの変化もありません。
「な、なーんだ。何も起こらないじゃ《ん》」
ため息混じりに颯火がそう呟いた途端、
パン
小さな破裂音がして、突如部屋が闇に包まれた。
「うわわわっ、停電！？」「電気つけて電気！」
「いや、停電なら、ブレーカー上げないと、電気つかないだろ…」
「え？」
パチ、颯火がスイッチを入れると、葬屋の言葉とは裏腹に、何の障害もなく部屋の電気がついた。何かがおかしい。そもそも、この部屋には窓があって、かつ、まだ昼過ぎだというのに、部屋が完全に真っ暗に成るはずなんて……、
ギシ、　ミシ
窓の方から、何かが軋む音が聞こえて、ふと、何気なく視線を向けると、
「っわあああ！？　なんだこれェ！？」

そこにあったのは目、目、目、目。無数の目が、窓覆い隠す闇の中に浮かんでいた。
「……違う、これは、ただの目玉じゃない…」
ギシ　ミシ　ギシ　ギシ　と、軋みは徐々に大きくなっていき…
「これは、――――――――――――――――――――悪言だ」
バリン！
ついに窓ガラスが割れて、目玉、否、悪言の大群が部屋の中になだれ込んできた。
「**ギシャァァァァァァァッ**」
「音斬！」
「「まかせて！」」
葬屋の呼び声に、ギターを構えなおして双子は待ってましたとばかりに歌い始める。
「♪　裂いた　裂いた　愛しい貴方
　並んだ　並んだ　赤黒死体
　どんな貴方も　綺麗だね！　」
童謡・チューリップのロックアレンジと共に、かまいたちが巻き起こり、悪言を次々と切り裂いていく。その間に、体勢を整えた葬屋と颯火が銃取り応戦する。
しかし、悪言の侵入は止まず、倒しても倒しても、数が減るどころか、増える一方である。悪言と戦いなれている四人ですら、じりじりと後退させられる。
「葬屋！　悪口を言うなって、こうなるからだったのか！？　でも、なんで！？」
「しらねーよ！　それより、この状況どうにかしないと！　おい、鋭利起きろ！」
葬屋は、こんな危機的状況でも寝たままの鋭利をたたき起こすが、当の鋭利は状況が飲み込めないようで、寝ぼけ眼である。
「おい！　鋭利、立て！」
「えー、なに～？　襟立ってるー？　俺の服、襟ないけどおー」
「空耳トークしてる場合じゃねーんだよ！　悪言の大群が、」
「あー？　こりゃー大変だねー。でも、ごめんね、僕悪言討伐向きじゃないんだ～」
ぼんやりと緊張感なく答える鋭利は《ぎなた読み》によって言霊を無効化する《打消し》。言葉の塊とはいえ、文章を崩すことができないため、悪言とは戦えないのだ。
「僕は由卯ちゃん達の様子を見てくるよー。悪言が侵入してるのは、きっとココだけじゃないからねー」
「ああ、任せた！　気をつけろ！」
「火をつけろ？　うん、確かに確実だけど、それは最終手段か…」
「空耳はもういいからッ！」
よくも悪くもマイペースな鋭利を見送って、葬屋はまた銃を取る。
「どーすんだよ、これ…」
かくして、ターム防衛戦、開戦である。

И

颯火達の部屋への侵入を皮切りに、窓という窓を突き破り、無数の悪言がターム構内に入り込んでくる。その勢いは止む様子を見せない。
「っおい！　これっ、どうなっ、てんだよっ、このっ、眼帯っ！」
「ぼ、僕にもさっぱり、わ、わ、分かりませんよーッ！」
『はっはー、息上がってるねえ、琴樹君？　そんなちんたら走ってちゃあ、あいつ等に食われるぜ？　口動かすくらいなら足動かしな！　ほら、がんばれ！(笑)』
「くっそっ、呪われろっ、このっ、ッー馬鹿ッ！」
廊下を全力で走る琴樹、蒼慈、霜一。その背後にも、悪言の大群が迫っていた。
いつも霜一を憑依させ素手で戦っている蒼慈はまだいいが、基本的にインドアなもやし系男子の琴樹は、この壮絶な鬼ごっこに体力がついていかないようだ。

「お前っ、強いっ、だろっ、っハァ、あれっ、どうにかっ、しろっ！」
『琴樹クンのお褒めに預かり光栄だけど、俺は《言葉》による支配と身体能力強化が売りだから、悪言退治にはあんま向かねーんだなァ、コレが。アハハ、悪いねー？』
息も切れ切れな琴樹に、そう意地悪く笑って言う霜一は、霊魂状態のため、フワフワと宙を飛ぶ様に移動している。琴樹にしてみれば、憎たらしいことこの上ないです。
こっちです！と、蒼慈に手を引かれて、物陰に身を隠し、三人は悪言の大群をどうにかやりすごした。琴樹はそのまま崩れ落ちて、苦しそうに荒い息を吐いている。
「そういえば、琴樹さんは逆言遣いでしたよね？　それで、悪言を追い払えば……」
「ッハ、悪い、けどっ、無能な僕にはっ、そんな芸当、でき、っこ、ない、んだよっ」
琴樹は、楽器を用いて悪言との交流を図る逆言遣いの見習いであったが、残念ながら才能はないのだ。この捻じ曲がった性格じゃ、悪言と歩み寄れるはずもないのは目にも明らかで、彼は自分で作った悪言の支配・操作しか出来ないのであった。
「でも、どうにかしないと！　琴樹さん、もう限界じゃないですか！」
戦えないなら広い構内を逃げ回り、他のメンバーに助けを求めるしかない。しかし、琴樹は立ち上がることすらままならない状態である。隠れ続けることも難しいだろう。
『…はは、そうだなあ、一つだけ方法があるぜ？』
霜一は口の端を歪め、倒れこむ琴樹の前に立って言う。
『俺がお前の憑依するんだ。そしたら、お前を俺の力で無理やり動かしてやれるぜ？悪口禁止の所為で力はそこまで残ってないが、憑依中も意識は残るからな。お前が中で罵倒してりゃあ、十二分に俺は動ける。どうだ、なかなか面白そうだろ？』
「そんなのっ、死ん、でもっ、嫌だっ…！　お前にっ、身体を、貸すなんてっ！」
『死んでも、ねェ？　ならそこでずっとヨガってな。悪言に喰われてあの世行きだ』
カラカラと笑う霜一を、琴樹は歯を食いしばり睨むことしかできない。
『珍しく俺がお前のためを思って言ってやってるのになァ？』
「どうだか、ね…、なにを、しでかすか、っハァ、わかったもんじゃ、ないよ…」
『はは、それもそーだなァ。……さ、どうする？　俺のこと、信じてみる？』
挑発的に問いかける霜一。琴樹は息を整え、クソッ、と悪態を一つついて、言った。
「……僕は、リンと幸せ、に、なる、まで、死ね、ない…っ」
『そーこなくっちゃァッ！』
琴樹の苦渋の決断に、霜一は楽しげに叫んで、琴樹の首に手を差し込んだ。そして、そのまま、ずるりと中へ入っていった。
「……兄さん、琴樹さん？　大丈夫、ですか…？」
問いかける蒼慈に、琴樹は無言のまま立ち上がり、
『ッハハ、いいねェ。悪くねェ！』
霜一と琴樹の声でそう答え、あの意地の悪い笑みを浮かべた。空前絶後の霜一ＩＮ琴樹に呆然とする蒼慈を、霜一はひょいと抱え上げた。
『蒼慈、お前も結構キてるだろ。ここはオニーチャンに任せな！』
「ああ、えっ、うん、こと、琴樹兄さん…？」
とてつもないギャップと違和感に呼び名が混ざっている蒼慈。混ぜるな危険。
そんな弟にも構わず、霜一は蒼慈を抱えたまま飛ぶように駆け出した。
この出来事はその後、琴樹の黒歴史として思い出の一ページに刻まれることとなる。

И

その頃、皐月と鶯は、部屋に悪言に扉をふさがれ部屋を出ることが出来なくなっていた水鳥と救出し、悪言から逃げつつ他のメンバーの元へ走っていた。
「大丈夫だ、水鳥、安心しろ。この程度の悪言他愛もないさ！」
鶯に抱えられ、怯える水鳥に笑って言う皐月。相変わらず、その根拠のない自信は

どこから来るのか分かったもんじゃありませんが、この時ばかりは心強いです。
「まったく、あの馬鹿共め、口喧嘩でもやらかしたな。しかし、ソレにしたって量が多いな…。ただの悪口の応酬程度で、こんな大量の悪言が生成されるのはおかしい…。…、つまり、そういう異常な事態が起こるのが、今日だと……、っうわァああ！？」
ブツブツつぶやき、考え事をしながら走っていたのが悪かったのか、皐月は背後から伸びた悪言の長い腕に足をとられてしまった。鶯は反射的に振り返り、
「――黙秘剣！」
抜刀し悪言の腕を切り裂いた。しかし、抱えていた水鳥を取り落としてしまった。
「大丈夫か、水鳥！」
足が自由になった皐月はしりもちをついた水鳥に駆け寄る。水鳥が大きく首を縦に振ったのを見て、安堵のため息をつき、鶯が一時的に悪言を食い止めている間に、持っていたメモ帳に『軽』と書き込み、水鳥に貼り付けた。
「よし、もういい！　行くぞ、鶯！」
水鳥を抱え上げた皐月が、鶯にそう叫ぶも、鶯は刀を振るう手を止めようとしない。
「鶯！　もういいと言っているのが聞こえないのか！　鶯ッ！」
その言葉に鶯は悪言を蹴って後方へ飛び、皐月達の前に戻ってきた。が、そのまま背を向けて立ちはだかり、刀を構えなおした。見ると、蠢く小さな悪言の中から、先ほど皐月の足を掴んだ、巨大な悪言が姿を現した。大量の悪言が狭い廊下を進むうちに、寄り集まってダマになったような歪な姿です。
「……鶯、まさか、こいつを自分ひとりで食い止めようなどと考えているわけでは、」
「……行け、」
皐月の言葉が終わらないうちに、鶯は小さく言い放った。
「馬鹿者が！　一人では無理だ！　こいつを倒すというなら、私も加勢する！」
「皐月ッ！」
珍しく声を荒げ、早く行くように急かす鶯。
巨大悪言から逃げ切るのは難しいでしょう。またさっきのように足をとられ、飲まれてしまうかもしれない。しかし、鶯一人で、二人を守ることは出来ません。一人でどうにかならないけれど、せめて時間稼ぎになろうと、鶯は刀を下ろしません。
「鶯、お前は相変わらず、自分で全て背負おうと、守ろうとする。馬鹿な奴だ」
鶯の背に、皐月は深くため息をついて、言う。
「お前がここに連れてこられてきた時もそうだ」
鶯がタームにいる目的はいつだかゼペットが語ったように、声が出ない妹の水鳥をどうにかしてやるためです。けれど、ここへ自主的にやってきたわけではありません。
鶯はかつて、母親から暴力を受けていていました。夫の事故死が受け入れられず、八つ当たりのように腕を上げる母親の相手は、鶯が一手に引き受け―そのために感情も殺し―幼い水鳥を守っていました。けれどある日、母親は自らの負の感情から生じた悪言に喰われ、鶯と水鳥はその時タームに保護されたのでした。
「昔から、変わらず馬鹿で愚かだ」
「……、」
「言っておくが、私はお前なんかに守られずとも死にはない！　なぜなら、私は天才だからだ！　それに、あの時言ったはずだ、私はお前を一人にはしないと！」
皐月はそう高らかに宣言し、巻物のような大きな紙を広げペンを走らせ始めた。
「……それでも、お前が私を守るというなら、私はお前を守る！」
ガツッと、百字近くの言葉を書きなぐった紙にペンをつきたてると、文字が浮かび上がり混ざり合って竜の形を成した。
「行け、鶯！」
皐月の力強い言葉に、鶯が振り向くと、反対側の廊下から別の悪言の群れが向かってくるのが見えた。

「しまっ……、」
このままでは挟み撃ちになる！　と、戦慄したその時、
『《ロセウ》！　《レサエキ》！　《ガズクノコ》ッ！』
どうッ、と悪言の群れをなぎ払って、現れたのは琴樹と蒼慈。
『ハハハ、逆言かァ！　これは使えるなァ！　俺の性質と相性抜群じゃねーか！』
「だ、大丈夫ですか、皐月さん、鶯さん！」
「ああ、助かったぞ。丁度人手が欲しかったところだ。しかし、それはいったい…」
「えっと、琴樹さんのことは、色々あって、兄さんが憑依してるんです…」
霜一の声で高笑いする琴樹をいぶかしげに見る皐月に、蒼慈は苦笑い。
『たらたら喋ってる暇じゃねェみたいだぜ。デカブツの堪忍袋が限界が近そうだ』
「そうだな！　鶯！　水鳥は私に任せろ！　お前の背中は私が守る！　信じろ！」
「……、」
皐月の言葉に鶯は背を向けたままうなずいて、巨大悪言に飛び掛った。その表情は普段より、どことなく明るかった。

И

「やだぁあああああ！　死にたくないよ葬屋ああああああッ！」
「うぜえええええええ！　言ってる間に撃てよ馬鹿ああああッ！」
侵入を続ける悪言の迎撃を続けていた葬屋達だったが、音斬のスタミナ切れにより撤退を余儀なくされ、結局四人も絶賛逃亡中。しんがりを勤める主人公二人は追ってくる悪言に銃をぶっ放し（弱音を吐き）ながら走っている。
「着いた！　葬屋、颯火！　こっち！」「早く早く！」
双子は二人の腕を掴んで無理やり部屋に引き入れ、勢いよく鉄扉を閉めた。ドオンという衝突音は続くものの、どうにか悪言の追撃を防げそうです。
「ここ、俺達が良く練習で使う防音しつなんだけど」「当分しのげると思うよ」
「ああ、どうにか一息か…」
銃やギターを降ろして座り込む四人。数時間にもわたる悪言との攻防は堪えます。
「ごめんね、二人とも…」「俺達ががんばれば逃げなくて済んだんだけど…」
「こればっかりはしかたねーよ。流石に何時間もギター弾き続けんのは酷だって」
「うう、葬屋優しいーッ！」「ありがとおおおっ！」
「キモッ！？　うざっ！！　寄るな！　うわああッ！？」
「しっかし、どうすんだよこれ。篭城作戦もそう長く続かねぇだろ？」
風刃と雷人に押しつぶされてる葬屋のことはガンスルーで、颯火が呟く。
「こうなることが分かってんなら、なんで爆と麗斗つれてくんだよゼペットの奴。あいつらいるだけで相当違うのに…、」
重たいため息。爆は《爆弾発現》の遣い手、擬音を使って手榴弾やらダイナマイトやらの威力を倍以上に引き上げることが出来ますし、麗斗も《笑えない言霊》で周囲のものを一瞬にして凍らせることが出来ますから、二人がいればまさに百人力です。
「仮定の話をしたってどうしようもないだろ。さっさと解決策考えようぜ」
その扉が破られる前に、と葬屋が言う直前に、
バギッ
と、黒い腕が鉄の扉を突き破り、扉から一番近い颯火の首元へと一直線に、
「颯火ァアッ！！」
葬屋が慌てて駆け出しても、颯火は声も上げられないままに腕につかまれ、扉の向こうへと連れて行かれてしまう。
「――ッ！　颯火ァアアアアああッ！」
「葬屋！」「待って！」

「♪　閉まれ、ゴマ！」

ギュイーンと音斬のギターが吠えると、扉に空いた穴が閉じてしまった。

「何すんだよお前らァッ！　颯火がッ！　颯火があっちに！」

「葬屋！　落ち着いて！」「今突っ込んで行っても、葬屋も飲まれちゃうよ！」

「でも、颯火が……ッ、颯火ァあ……、もしこれで颯火が死んだら……ッ」

「大丈夫、助けよう、俺達も協力するから！」「仮定の話はダメなんでしょ！？」

「「葬屋！」」

音斬の呼びかけに、葬屋は嗚咽を飲み込み、崩れ落ちそうに成る身体を無理やり立たせて、双子へ振り返った。

「……、そうだな、早く、助けてやらないと、」

――俺が行くまで、待ってろよ、颯火

И

酔いそうなほど暗い冷たい場所で目が覚めた。つかまれた首元は血が滲んでいる。

(なんだここ…、悪言の中か……？)

『やあ、ひとりぼっちになったみたいだね』

突然闇から冷たい声がした。とっさに銃を掴むも、声の主は見当たらない。

『きみはずっとひとり。わすれたの？　このつめたさ、忘れちゃったの？』

クスクスというかすかな笑い声が妙に響く。気持ちが悪い。吐きそうなほどの悪寒。

『むかし、きみはひとりだったよね。だれもそばにいない。つめたいせかい』

「五月蠅い」

『だれもきみのはなしをきいてくれない。だれにもほんとうのことをうちあけられない。ひとりっきりでなくしかなかったよね？』

「五月蠅ェっていってんだろォオッ！」

『そう、それ、』

虚空に向かって突きつけた銃口の先に、暗い賭けが一つ。

『それの、せいだったよね？』

忘れようとした記憶。忘れかけていた孤独。冷や水を浴びたように、頭が真っ白になって、冷たい過去が蘇る。

それは、小学校の頃だった。

たくさん友達がいた。両手じゃ数え切れないほどだった。毎日外を駆けずり回った。

ある日のこと。他愛もない、良くあること。俺が毎日持って行ってるハンドガン―父からもらったもう使えない銃―を友人たちがふざけてとりあげたんだ。

そのハンドガンは俺にとっては父から唯一もらった、宝物で、大切なもので。

すぐに取り返そうとしても、それを面白がってヤツラはやめない。大切なものだからと言っても逆効果だった。いつの間にか俺はヤツラに殴りかかっていて、ようやく取り戻した銃を友人に突きつけて、引き金を引いた。

『死ね！』

それが、初めて使った言弾だった。

ドウ、と重たい反動と、友人の顔の横に、ぽっかりと明いた穴。

友人は泣きだして、逃げていった。他の友人もゆっくりと遠ざかっていった。

『殺される』

そんな恐怖から、誰も俺に関わらなくなって、あっという間に一人になった。

母に打ち明ける勇気がなく、俺は居もしない友達の話を毎日母にした。

辛かった。酷く肌寒かった。誰にも話せない弱い自分が嫌いになった。銃を握る自分が嫌いになった。誰とも話せなくなった。

そして、独りになったのだ。

『そう、きみはひとりだ。ずっとずっと、このやみのなかでひとりだ』
「違う！　俺はもう、一人じゃない！　だって＊＊＊がいるから！」
あれ？
暗闇の中で視界が揺らぐ。記憶を手繰り寄せても、其処だけが抜け落ちている。
誰だっけ？
傍にいたのは、
それとも、始めからいなかった？
『ひとりだ』
頭痛がする。冷気に酔う。暗闇に息が出来なくなる。視界が定まらない。
全ての感情が抜け落ちて、冷たさだけが残るような、
『おまえはひとりだ』
声が頭を、意識を支配する。
「嫌だ！　嫌だ！　独りは嫌だ！　嫌だッ！」
誰か！
（颯火！）
遠くに声を聞いた。反射的に銃口を向ける。
「颯火！」
ザァ、と視界が開けた。光の中、差し伸べられた手に、記憶が重なった。
『お前、友達ならない？』
独りで家に帰る途中、突然声をかけられた。振り返ると、知らない子が立っている。
『何でだよ』
『俺、友達いないんだよね。この前喧嘩したら、友達いなくなっちゃったんだ。こわいってさ。いままで一緒だったのにね』
表情一つ変えずにそういったヤツは、俺の隣に並んで歩く。
『寂しくない、一人？　俺は寂しい』
『……、』
『お前も、友達なくしたんだろ、ちょうどいいじゃん』
『……お前だって、どうせいなくなるんだろ』
あいつ等みたいに。優しい顔がはがれた途端にいなくなるんだ。
『いなくなんないよ』
『無理に決まってる』
『大丈夫だよ、約束する』
『信じられないな』
『信じてよ』
ヤツは俺の前に立ちはだかって手を差し伸べた。
『約束しようよ。俺達は互いに本音で付き合う。我慢とか、遠慮とかしない。嫌なこと隠さない。ただ、相手のことは絶対に見捨てない。傍にいる』
『……でも、俺はお前を殺すかもしれない』
またあの時みたいに、銃口を突きつけて、死んでしまえと叫ぶかもしれない。
『じゃあ、やってみなよ。俺、お前みたいなへなちょこに殺されたりしないね』
『なんだと！？　誰がへなちょこだってッ！』
あはは、とヤツは笑って言った。
『お前も俺もさ、友達なくすようなダメな奴だけどさ。二人でいれば何でもできるよ！ほら、だって、今、友達だって出来たじゃん！』
『変な奴』
『お前、名前は？』
『颯火』
『俺はね、葬屋』

「颯火ッ！　つかまれ！」
声と共に、もう一度差し伸べられた手を俺は迷わず掴んだ。

И

「反撃開始だ、颯火！」
「やってやろうぜ、葬屋！」
悪言から脱出した二人は、そのまま二人で飛び上がって銃を構え、叫ぶように言う。
【ふ】ざけんな！　ほら、約束通り助けに来《た》」
【た】すけに来んのが遅ェんだよ！　寂しかったんだぞ！　独《り》！」
【り】ょうかい了解。かしこまりましたー。《で》？」
【で】も、ありがと…。これでいいかようるせー奴だ《な》！」
【な】んとでも言え。特別に許してやるよ阿呆。友達だもんな、俺《ら》」
【ら】いばるで幼馴染みで親友で相棒だ馬鹿野郎！　葬屋！」
【や】くそくだからな。一度だって忘れてたことねーよ。分かったら黙《れ》」
【れ】いせいになれよ。そんなこと言われなくたって分かって《る》」
【る】せなー。じゃあ言わせんなよ恥ずかしい。…俺達《さ》、」
【さ】よならする日がいつかくるかも、なんて馬鹿なこと思ってんの《か》？」
【か】なわねー《な》」
【な】んでも分かるよ単純な手前のことな《ら》」
【ら】いねんも十年後も必《ず》」
【ず】っと一緒《だ》！」

―ふたりでならやれさ　かならず―

途端、二人の銃が合わさり、大型の対物ライフル（アンチマテリアル）へと変形した。
照準を悪言の群れに合わせ、引き金に手をかける。
…言葉の力は繋がりが深ければ深いほど、強力になる。縦糸と横糸で繋がった言葉は、何よりも強力な言弾となる！

「「弾丸不断（エンドレス）！」」

耳を劈く発砲音とともに、放たれた弾丸は周囲にいた全ての悪言を吹き飛ばした。
硝煙が凪いだ頃には、廊下に溢れていた悪言は全て消えうせていました。
やりました！　大勝利です！
「っしゃあああああ！」
「やったね、葬屋！」「おかえり、颯火！」
「ありがとな。颯火も礼言っとけよ、こいつらが協力してくれなかったらお前のこと助けられなかったんだからさ」
「えへへへ！」「どうってことないよ！」
その通り。そもそも、音斬が防音室に逃げ込んだのは、其処に置いてあるアンプを使うためでした。ギターをアンプにつなげることで音量―即ち威力―を上げ、なだれ込む悪言をことごとく蹴散らし、葬屋は颯火の元へ辿りつくことが出来たのでした。
「うわ、お前、何、泣いてんの？」
「もー、まじつらかった、シリアスシーンまじつらかった、ほんとつらかった」
颯火くん迫真のシリアス、お疲れ様です。
「あーもーぜったいやんねー、シリアスとかもう二度とやりたくねーっ！」
泣きじゃくる颯火。いや、泣くとこ間違ってますよ颯火くん。
「とりあえず！」「これで一件落着だね！」

「「めでたしめでたし！」」
いや、大技決めて、清清しいラストでしたね。葬屋くんと颯火くんの友情も再確認したところで、このお話はお終いに……
ドォン、
ん？　嫌な予感がする。
「なあ、なんか音しねぇ？　気のせい？　ねぇ俺の気のせい？！　幻聴！？」
「いい加減落ち着けよ、颯火！　確かになんか聞こえる気が……、」
ドォン、ともう一度鈍い音がすると、廊下の向こうに黒い大きな影が躍り出て、なんだか全力でこちらに向かってきます。
……、はい、どうみても悪言です本当にありがとうございました。
「葬屋、俺もう気力が持たない」
「俺ももう諦めたい、颯火」
「俺達ももう曲のレパートリーがないよ！」「みんなで悪言にダイブだね！」
アッハッハッハと、乾いた笑みで迫り来る悪言を呆然と眺めていると、
「「いただきまーす！」」
横合いから少年二人が飛び出し、その腕で襲い掛かる悪言を殴った。
いや、正確には、その腕から伸びる悪言で、悪言を喰らい始めた。
「はァ！？」
みるみる内に、悪言は汚らしい悲鳴を上げながら少年たちの腕に吸い込まれていく。
なにこれ。ただのチートキャラじゃないですか。
「おーい、大丈夫ッスかー？」
と、少年達に遅れてやってきたのは、白い軍服を着た二人の男性。
「「父さん！？」」
颯火と葬屋のお父さんでした。……、ちょっとまとうか。展開が速すぎですね。
「な、な、何でココにいんの？　どういうことなのッ！？」
「それは私から説明するよ、二人とも。まったく、だからダメだって言ったのに…」
言いながら、最後に現れたのはゼペットさんと、煤まみれの爆、と疲れ気味の麗斗。
「ひとまず、みんなをホールに集めてくれるかな」
悪言と戦いながら逃げまわっていた鶯、霜一一行、部屋に隠れてどうにかやり過ごしていた鋭利と由卯、そして葬屋一行がホールに集まった。皆、疲れてボロボロです。
「昨日、この近くでデモストが合ってね。負の言葉エネルギーが一時的に濃くなって、悪言が発生しやすい状況にだったんだ。で、私は悪言の研究家として、軍の人たちとエネルギーの中和と、悪言の討伐に出かけてたんだ」
朝は時間がなくて説明して上げられなくてごめんね、とゼペットは言った。
「本当は、ただの悪口なら大丈夫なんだけど、琴樹くんや、霜一くんみたいに、強力な負の言霊を使うと、周りのエネルギーが引き寄せられて、悪言が大量発生しちゃう危険があったから、悪口はダメだよっていったんだ……けど、逆効果だったね」
「でも、俺達悪口はそこまで一言くらいしか言ってないぜ？」
「君達、しりとりしてたでしょ。その所為で力が大きくなっちゃったんだよ」
なるほど、だから悪口を言った直後じゃなくて、《ん》が付いた時に悪言が大量に発生したんですね。しりとりの効果は《ん》が付いた時に出ますから。
「まったく、普段からちゃんとした言葉遣い使っていれば、」
「そうッスよ！　仲良くしなさいねっていつも言ってるじゃないッスか！」
「それなのに、いつも喧嘩ばかりして」
「死ねとか言っちゃダメだって何度いえばわかるんスか？」

「そんなんだからタームに入ることになるんだ」
「そこのところ、忘れないで欲しいッスよ！」
葬屋父＝墓守と、颯火父＝疾風がたたみかけるように言う。もう何も言い返せない。
ちなみにこの二人は、大陸全体の悪言討伐を任とする大陸治安維持軍の幹部です。
「まったく、めんどうなことしてくれるよねー。もっと考えて行動しろって感じ」
「あ、あんまりにたくさん悪言いたからぼぼぼぼぼくこわっこわかったよおお！」
このふてぶてしいのとうっとおしいのは、先ほどの悪言の腕を持つ双子、闘詞くんと純志くん。かつてはタームが管理していた、悪言を原動力として動く死体、悪言人形です。腕からでる悪言で、他の悪言を喰らうという対悪言最強の人材で、昔色々あって颯火と葬屋のお父さんに引き取られました。またそれは別の話。
タームに侵入していた悪言はこの双子と、爆・麗斗が全力でボコりました。
とにもかくにも、ようやくひと段落ですね。
「くそ…、切羽詰っていたとはいえ、コイツに身体乗っ取られたとか最悪だ…ッ！」
ホールの隅では霜一から開放された琴樹が、頭を抱えて蹲っている。
『そう落ち込むなって、少年。結構楽しかったじゃねーか』
「それお前だけだよ、この《ピー》野郎！　大ッ嫌いだ！　さっさとあの世に行け！」
『あははは！　俺お前のそーゆーとこ嫌いじゃないぜ！　もっと罵っていいよー！』
「ああ、やっぱりこれですよね！　怖いけど、琴樹さんはそのままが一番いいです！」
「なんだよお前、気持ち悪いな」
「ひどいッ！？」
この一件で琴樹と蒼慈・霜一が少し歩みよるかと思いましたが無理そうです。
『でも、逆言？　あれ面白かったからまたやろうぜ、琴樹クン！』
「お・こ・と・わ・り・だッ！　ところで、鶯。お前、なんかすごい美味しいシチュエーションじゃなかったか？」
琴樹の言葉に、皐月との一連のやりとりを思い出した鶯は、
「……っ！？　あっ、……えっ、そのっ……うっ…、…ああ……」
見事に真っ赤です。しどろもどろとはまさかにこのことですね。
「どうした鶯？　どこか痛いのか！？」
「……も、もくひ、する……」
「ふふん、そうはいかないぞ！　私だってな！　お前の目を見れば何を言いたいかがわかるのだ！　琴樹だけじゃないぞ！　ふむ、なるほど、おなかがすいたのか」
「違うだろ。ていうか、対抗心燃やしてたの？」
「だってー！　私のほうが鶯と付き合いながいんだぞーッ！　負けないぞコノー！　私から鶯をとりやがってちきしょーッ！　誰にもやらないんだぞ馬鹿―ッ！」
皐月さん、負けず嫌いは分かったから、そろそろ止めないと鶯のライフがゼロです。
「……、でも、なんだろう、なんか僕と同じ道を辿る気がしてきた……」
「とにかく、みんな無事で」「さらに仲良くなってよかったね！」
騒ぐ面々を見て、珍しくまとめの流に入る音斬。
「そうだな、颯火のシリアスシーンも見れたし」
「それもう忘れてください」
「俺達の厚い絆も再確認できたしな」
「それ気持ち悪いから止めてください」
「なんだよ、俺達、友達じゃねーのかよ」
「親友だ、馬鹿」
顔を見合わせて苦笑する二人。雨降って地固まる、まさしくその通りです。
喧嘩するほど、とはいいますが、たまにはこういうのもいいですね。
綺麗にまとまったところで、このお話はお終い。めでたし、めでたし。

《ENDLESS》